

巻頭言

日本惑星科学会への期待

現代は直接自然に対峙する機会がだんだん薄れてきているといわれる。われわれの目にするもの、手に触れるもの、多くのものが、加工された情報である。しかも、どんどんユーザーフレンドリーなものとなってきている。それにつれて、大人はもちろん子供の世界でも、自分の五感を通して得られるものは少なく、書物やテレビなどからの情報がほとんどである。多くのものは中身はブラックボックスのままである。

惑星科学の世界でも、中身はブラックボックスで左のものを右にやるだけというような虚学にならないでほしい。

自然に直接向かい、そこからデータを引き出すことは科学の基本である。しかし、惑星科学の場合はこれが極めて難しい。地上観測や隕石の研究を通しての研究はもちろん重要で多くの貢献をしてきたし、これからもし続けられると思われるが、現代において惑星探査のない惑星科学はありえない。

昨年はやぶさが小惑星イトカワに到達して観測を行った。われわれはまさに小惑星の生データを手にした。いま、はやぶさサイエンスのチームはこのデータを見て、驚き、とまどい、どのようにサイエンスを作り出すかという、科学者としての醍醐味を味わいつつある。

惑星科学会の会員でもありはやぶさサイエンスチームのメンバーが、（とくに若い人たちは）長期間、厳しい研究環境にもかかわらず、無理を承知で、惑星探査プロジェクトに実際に参加して、計画の策定、機器開発、各種試験、運用計画と実運用、データ処理、成果の取り纏めと発表など、多くの雑用に近いことも含めて行ない、手探りで得た経験は極めて多い。

これらを貴重な財産として、いかに不都合なところを改善し今後に繋げていくかを考える必要がある。これらは極めて多岐にわたるが、この惑星科学会に関連することにかぎっていると、いかにして多くの大学関係者がこのようなミッションに関わっていける体制をつくり上げるかが当面の最大課題であろう。大学などのスタッフや学生が長期にこのようなミッションに関れるような予算、体制、ポジションの確保など、どのようにすればよいか。論文数のみの人事評価の風潮も改善していくべきである。そして惑星探査にたいする大学研究者の敷居を下げ、研究者がこのような惑星探査活動と遊離したり、ギャップを作ることなく学問的にも連続的に繋がっているような集団を作る必要がある。着実な改善によって、ますますよい探査の成果が出されるようにポジティブフィードバックがかかるようにしなければならない。惑星科学探査にもっとも近い学会は本学会以外にない。このために惑星学会に期待される事柄は多い。今手元にある惑星学会設立当時の1992年4月10日付けの朝日新聞記事を見ると、「日本惑星科学会 - 探査機計画にらみ発足」という見だしのもとに惑星探査の将来計画や国際協力の窓口としても学会を役立てたい、という趣旨のことが書かれている。初心に戻って、また、成果が出つつあるこの時期だからこそ、惑星探査に関わる問題点を分析し、具体的な提言をしていくことが必要のように見える。学会が同好の士の集まりから、もの言う集団へと進むことを期待したい。そしてわれわれ自らの手で、なまの惑星に触れる機会がますます増えていくことを願っている。

藤原 顕 （宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部）